2010年3月13日

審判メカニクスハンドブックの訂正箇所

P39　バッターアウトの絵図が指差しになっているが拳を握る。

P56　2009.11　変更点

P79　タッグアップと打者走者のスリーフット・レーンを確認する。

P81　点線の図本塁へは行かない。

P111　三人制なので一塁位置の塁審はいらない。

P150　1Bの本塁のところ（打者走者の）の間違い。

P151　上の図PLの動きは下図と同じ。

P186　※印のタッグアップがタッグプレイの間違い。

P188　三人制のところで※印のハンズ・オン・ニー・セットが
ハンズ・オン・ニーズ・セットの間違い

P194　※印のタッグアップがタッグプレイの間違い。
ハンズ・オン・ニー・セットが
ハンズ・オン・ニーズ・セットの間違い

P200　※印のタッグアップがタッグプレイの間違い。
ハンズ・オン・ニー・セットが
ハンズ・オン・ニーズ・セットの間違い

P206　※印のタッグアップがタッグプレイの間違い。

P220　※印のタッグアップがタッグプレイの間違い。

二〇一〇年度　野球規則改正

日本野球規則委員会

(1) 二・四四 (d) を次のように改める。(傍線部を改正)

観衆の妨害――観衆がスタンドから乗り出したり、または競技場内に入って、(1) インプレイのボールに触れた場合、(2) インプレイのボールを守備しようとしている野手に触れたり、じゃまをした場合に起こる。

(2) 三・一〇 (c) および同【原注】を削除する。

(3) 四・〇一 (d) の最後尾に次の文を追加する。

球審はプレイを中断した後、少なくとも三〇分を経過するまでは、打ち切りを命じてはならない。また球審はプレイ再開の可能性があると確信すれば、一時停止の状態を延長してもさしつかえない。

(4) 四・〇一 (d)【原注】を追加する。

球審は、いかなる場合でも、試合を完了するように努力しなければならない。試合完了の確信があれば、球審は、その権限において、三〇分にわたる〝一時停止〟を何度くり返しても、あくまで試合を続行するように努め、試合の打ち切りを命じるのは、その試合を完了させる可能性がないと思われる場合だけである。

(5) 四・一二 (d) を削除する。

(6) 六・〇二 (d) (1)【原注】の冒頭に次の文を追加する。

球審は、打者の違反がちょっとした不注意であると判断すれば、その打者のその試合での最初の違反に対しては、自動的にストライクを宣告せずに、警告を与えることもできる。

(7) 六・〇五 (i) を次のように改める。(傍線部を改正)

打者が、打つか、バントした後、一塁に走るにあたって、まだファウルと決まらないままファウル地域を動いている打球の進路を、どんな方法であろうとも故意に狂わせた場合。

2.32 ファウルボール

(8) 七・〇九 (b) を次のように改める。(傍線部を改正)

打者または走者が、まだファウルと決まらないままファウル地域を動いている打球の進路を、どんな方法であろうとも、故意に狂わせた場合。

(9) 七・〇〇補則 (A) (e) (5) を次のように改める。(傍線部を改正)

打者または走者が、まだファウルと決まらないままファウル地域を動いている打球の進路を、どんな方法であろうとも、故意に狂わせた場合。

(10) 八・〇一 (f) を追加する。

(f) 投手は、球審、打者および走者に、投手板に触れる際、どちらかの手にグラブをはめることで、投球する手を明らかにしなければならない。

投手は、打者がアウトになるか走者になるか、攻守交代になるか、打者に代打者が出るか、あるいは投手が負傷するまでは、投球する手を変えることはできない。投手が負傷したために、同一打者の打撃中に投球する手を変えれば、その投手は以降再び投球する手を変えることはできない。投手が投球する手を変えたときには、準備投球は認められない。

投球する手の変更は、球審にはっきりと示さなければならない。

(11) 八・〇二(a) (2) ～ (6) ペナルティ (a) を次のように改める。(傍線部を改正)

投手はただちに試合から除かれ、自動的に出場停止となる。マイナーリーグでは、自動的に一〇試合の出場停止となる。

(12) 八・〇二(b)後段を次のように改める。(傍線部を改正)

本項に違反した投手はただちに試合から除かれる。さらに、その投手は自動的に出場停止となる。マイナーリーグでは、自動的に一〇試合の出場停止となる。

二〇一〇年一月二十八日

以上

1　平成２２年度　第６７回定時評議員会決定事項

ボールカウントコールの変更について

プロ・アマ野球界全体が国際方式に改めたのに伴い、（財）全日本軟式野球連盟も今年度から、球審のボールカウントのコールは従来とは逆にして、ボール、ストライクの順にすることを決定いたしました。

従来の「２ストライク、３ボール」は、今年度から「３ボール、２ストライク」とコールします。

2　競技者必携２０１０年度版改定箇所

１．ストライクゾーン（アマチュア内規廃止）Ｐ８

イラストの変更

２．競技運営に関する連盟取り決め事項　Ｐ２０

１２　ダブルヘッダーに関する事項

１日２試合まで行うことができる。継続して行う場合は、試合終了後３０分を以内目安に開始する。

１４　突発事故のタイムについて（５．１０ｃ、ｈ関連）

試合中、「プレーヤーの人命にかかわるような事態が発生した場合、人命尊重を第一に、プレイの進行中であっても、審判員の判断でタイムを宣告することができる」。この際、その宣告によってボールデッドとならなかったらプレイはどのようになったかを判断して、ボールデッド後の処置をとる。

３．競技に関する連盟特別規則　Ｐ２８

十三．監督またはコーチが、投手のところへ行く回数の制限（８．０６）

２　捕手または内野手が、一試合に投手の所へ行ける回数を、９イニングスの試合にあっては４度、７イニングスの試合に合っては３度以内とする。ただし、監督またはコーチと共に行った場合は除く。なお、延長戦（特別延長戦も含む）となった場合は、２イニングスに一度行くことができる。（破線部を削除）

監督またはコーチがプレーヤーとして出場している場合は、投手の所へ行けば野手としての一度と数えるが、協議があまり長引けば、監督またはコーチが投手の所へ一度行ったこととして通告する。

十五．競技者のマナーについて

マナーアップとフェアプレイの両面から、次のような行為を禁止する。

（１）捕手が投球を受けたときに意図的にボールをストライクに見せようとミットを動かす行為を禁止する。

（２）捕手が自分でストライク・ボールを判定するかにように、球審がコールする前にすぐミットを動かして返球態勢に入る行為。

（３）球審のボールの宣告にあたかも抗議するかにように、しばらくミットをそ

の場に置いておく行為。

（４）打者がヒジ当てを利用してデッドボール狙いの行為。

（５）打者がインコースの投球を避ける動きをしながら当たりにゆく行為。

（６）プレイ中みだりにベンチを出る行為。（次打者、競技に出る準備をしているものを除く。）

４．規則適用上の解釈　Ｐ３８

（１４）故意四球と捕手の位置（４．０３ａ、８．０５ｌ）

審判員が“故意四球”が企図されたと判断する場合とは、捕手があらかじめ捕手席内で立ち上がって投手の投球を待つ姿勢をとり、しかも誰が見ても作戦上その打者を敬遠するという守備側の意図が明らかな場合に限られる。

たとえば三塁に走者がいて、スクイズプレイを防ぐためにウエストボールを投げさせようとして、捕手が腰をかがめたままで投球を待つようなときには、片足を捕手席の外に出しても、投手にボークを課さないものとする。

（１５）走者二・三塁での連続偽投（８．０５ｃ関連）の解釈について

走者二・三塁で、投手が正しく偽投をし、投手板を踏んだまま連続して二塁へ偽投もしくは送球することについて、アマチュア野球では「ある塁に偽投して、引き続き他の塁に偽投または送球する場合には、投手板をはずさないといけない」はずさなかった場合には、ボークとする。

（２０）ベースコーチの肉体的援助（７．０９ｈ）について

塁に複数の走者がいて、一走者に対するベースコーチの肉体的援助があった場合、その走者に対して送球されるなどプレイが直接行なわれているときは即ボールデッドとするが、それ以外の場合は即ボールデッドとせず、すべてのプレイが終了してからボールデッドにして、肉体的援助のあった走者をアウトにする。ただし、二死後にベースコーチの肉体的援助が発生したときには、その走者を即アウトにする。

（２１）飛球が捕らえられリタッチが生じた際の「ボールデッド中の塁の踏みなおし」（７．１０ｂ付記（２）注四）について

飛球が捕らえられたときのリタッチを果たす際も、塁を空過した場合と同様、ボールデッドのもとでは「次の塁」に達すれば、リタッチを果たさなかった塁を踏みなおすことは許されない。この場合の「次の塁」とは、ボールデッドになったときの走者の位置によって定まる。たとえば、走者が

①二・三塁間のときは三塁が次の塁

②三・本塁間のときは本塁が次の塁

③本塁に達していたときは「次の塁がない」ことから、その走者がダッグアウトに入ってしまわない限り、リタッチを果たすべき塁の踏みなおしは許される。

５．審判上の取り決め事項ならびに注意すべき規則　Ｐ１５９

十五、正しい投球姿勢の徹底（８．０１ａ、ｂ）

1　投手がセットポジションに入るとき、一塁へ左肩（右投げ）を大きく振って「偽投に間違えられる極端なものに限定」それから向き直ってストレッチに入る入らないに関係なく、偽投と類似の動作をした場合。（ボークとなる）

2　二塁に走者がいるとき、投手が二塁に顔を強く振りながら「自由な脚および両手が伴いあまりにも不自然な投球動作」をした場合。（ボークとなる）

3　投手が投球する際に一度離れた両手を再び合わせたり、投げ手でグラブをたたいたりすることの禁止。（注意指導）

4　セットポジションから投球する投手は、投球するまでに必ずボールを両手で保持したことを明らかにしなければならない。その保持に際しては身体の前面ならどこで保持してもよいが、打者あるいは走者の位置によってその保持する箇所を変えることは欺瞞行為にあたる。したがって、同一投手は、一試合を通して同じ位置でボールを保持しなければならない。（注意指導）

６．審判員の構え、判定と宣告、ジェスチャー　Ｐ１８０

墨審の待機位置と姿勢

攻守交代時における墨審の待機位置と待機姿勢は、一・三塁墨審はベースの約２０メートル（または芝の切れ目約５メートル）後方で内野側に約３メートルとし、二塁墨審は二塁ベースとセンターとの中間付近とする。

いずれも、観客・選手と離れた位置とし、足を肩幅に開いてリラックスして、手は後ろで組む姿勢とする。

新たに追加された項目は、タイトルをゴシック表記にしました。　Ｐ２０５

1．規則適用上の解釈について

（1）二死走者三塁。打者がピッチャーゴロ。ピッチャー捕って本塁に送球。セーフ。その後、捕手が一塁に送球しようとしたところその本塁を踏んだ走者に妨害されて送球できなかった。得点は認めて三死となるのか。

―― 味方のプレーヤー（または仮に得点した走者）の妨害によって打者走者がアウト。三死。したがって打者走者が一塁に達するまでのアウトで、それが三死に当たるため、規則４．０９（a）【付記】（1）により、三塁走者の得点は認められない。

（2）後位の走者がアウトになってそれが三死に当たるとき前位の安全進塁権を得た走者の得点はどうなるのか、については、現在守備側のミスで与えた安全進塁権（たとえば押し出し四球、ボークとか）の場合は、三死後に本塁を踏んでも得点は認めるが、一方攻撃側のミスプレイで後位の走者がアウトになった（追い越しアウトとか）場合は、その三死と安全進塁権を得た前位の走者が本塁を踏んだのとどちらが早いかのタイムプレイとなる、との解釈をとっているが、当面この解釈を継承する。

2．ボールカウントコールの変更について

プロ・アマ野球界全体が国際方式に改めたのに伴い、（財）全日本軟式野球連盟も今年度から、球審のボールカウントのコールは従来とは逆にして、ボール、ストライクの順にすることを決定いたしました。

従来の「２ストライク、３ボール」は、今年度から「３ボール、２ストライク」とコールします。

3．「キャッチャースボックスから出ない」運動の実施について　　規 P55(a)

昨年「キャッチャーミットを動かすな」運動に取り組んだ。最近キャッチャーが投球前にキャッチャースボックスから出て構えるのが目立つ。これは規則上許されることだろうか。正しい野球を推進していくためにもこの乱れの是正に今年度は取り組みたい。故意四球の場合はボークとすると明確だが、それ以外についても規則違反と思われるが、規則上、違反に対するペナルティがはっきりしていない。

したがって、今年度は指導期間と位置づけ、是正に取り組んでいきたい。

これに対し、どこまで足を出したら指導するのか、少しでも出てたら指導かといった質問が出て、何か基準がほしいということで意見交換の結果、「捕手の身体の大部分がキャッチャースボックス」から出ている場合を目安として指導していくこととした。

以上